恵泉園芸センターの50年[1]

森山　倭文子（恵泉園芸センター元所長）
「恵泉の園芸教育の歴史をたどる」プロジェクト研究班

恵泉園芸センターは恵泉女学園短期大学園芸科の事業部として昭和28年に生まれました。卒業生が中心となって運営にあたってきた花屋です[2]。“花を生活の中に”を開設以来のモットーとして、切り花の販売はもちろんのこと、ウェディングブケー、教会の飾りつけ、テーブルの盛り花、贈りものの花、そして悲しみの装飾など、多くを手がけて参りました。花のいのちを重んじ、花のもつ美しさを、たくさんの方々に知っていただきたいと考えて、心をこめて一つ一つの仕事に誠実に取り組んで参りました。

そして50年が経ちました。2005年3月に短大が廃止となり[3]、私は定年を過ぎていたこともあり退職しました。その間、どれだけ多くの方々に援けられてここまできたか、くることができたか―。感謝の連続です。その50年の歩みをふり返ってみたいと思います。

高木俊介メモリアル アンデルセン芸北100年農場

先週、広島のアンデルセン[4]に行ってきました。高木彬子相談役[5]とお会い

1　本稿は、第一回恵泉園芸フォーラム（同窓会主催　2007年10月6日〈土〉会場：恵泉園芸センター、司会：村田あや短園35回）での講演の録音テープをもとに、園文研プロジェクト研究班が協力して草稿に起こし、ご本人の加筆をいただいたうえで研究班がまとめたものである。本稿はまた、2008年度プロジェクト研究「恵泉の園芸教育の歴史をたどる－基礎資料の蒐集と分析」（代表者：西村悟郎）の報告書である（共同研究者：深谷佐紀子・土屋昌子・新妻昭夫・松井信行・原嶋夕佳・山浩美）。

2　1954年4月設立。世田谷校内購買部の一角に開店。1955年斉藤ビル、1960年飯野ビル、1979年六本木（現在地）に移転。学校法人恵泉女学園規定集 第1章 寄付行為 第6条に収益事業として規定がある。

3　1945年に恵泉女子農芸専門学校として設立された恵泉女学園園芸短期大学は、2004年度をもって60年の歴史を終え恵泉女学園大学に統合された。

して、アンデルセンの「100年農場」を見せていただくことになっていました。その農場は見渡す限りの山のなかにありました。56万坪という信じられないくらい大きな山の中です。4年目を迎えた農場を案内していただきましたが、そこで働いている人たちが本当に生き生きしていました。男性と女性あわせて10名の人たちが山林を少しずつ拓いて開墾し、小麦を育てています。

アンデルセンは、規模やその考え方からみて、私は日本一のパン屋だと思います。アンデルセンには「高木俊介製パン学校」があって、そこの研修生が働いているのです。毎年5人ずつ希望者を募り、この農場で2年間働き、学びます。小麦を栽培し、自分たちでできる範囲で自給自足も心がけています。野菜を育てている畑があり、また石のパン焼き窯を自分たちで作って、それでパンを焼いて、おいしいピザも作っていました。

いちばん感心したのは、そこで働いている10人の人たちがとても礼儀正しく生き生きしていて、ようこそ来てくださいました、と迎えてくださったことです。私は彬子相談役とご一緒していましたが、そんなこととは関係なく、とても感じがいいわけです。昔の園芸科を思い出していました。

ただ耕すだけではなく、麦を植えて育て、そしてそこで暮らしを創る。その基本的な考え方はどこからきたかというと、内村鑑三先生の『デンマルク国の話』[6]だそうです。亡くなられた創業者高木俊介氏は戦地から帰って来られてからこの本を読まれ、感銘を受けられたそうです。自分たちで耕して、種をまいて、それを育てる。そして自分たちで育てたもので日本の暮らしを作りなおそう、そういう志を持っておられた。

偶然ですが、私もいろんなところで内村鑑三先生の「デンマルク国の話」をしていました。敗戦後の日本もデンマークのようにできたら、これこそ日本

4　1967年、「アンデルセン」の一号店として広島市本通にオープン。アンデルセングループは㈱アンデルセン・パン生活文化研究所を持株会社とし、直営店舗「アンデルセン」を展開する㈱アンデルセン、冷凍パンシステムを活かしFC展開をする㈱マーメイドベーカリーパートナーズ、小売店舗やレストラン、カフェなどへの卸の業務を担当する㈱タカキベーカリー、グループ内専門業務を担う㈱アンデルセンサービスをはじめ、14の会社で成る。

5　夫、俊介氏と共に1948年広島市にタカキベーカリーを創業。現相談役。

6　内村鑑三『後世への最大遺物　デンマルク国の話』岩波文庫 岩波書店 1946年初版

の復興にとっていちばんじゃないかと、いろんな人と話しあっていたことがあったのです。

その志が実現して、高木俊介氏の夢が現実の農場となって、目の前にあるわけです。切り拓かれた農場で、若い人たちが汗水たらして働いている。それは園芸科の卒業生としてはちょっとショッキングな体験でした。

アンデルセンとの出会い

その日、私が広島に着いて、アンデルセンの恵泉フラワースクールアンデルセン教室の先生たちと話していたところへ、彬子相談役が入ってこられた。そして挨拶もそこそこに「恵泉とのお付き合いも40年になりますね。いま思い出してもおかしいわ」と話しはじめられました。

アンデルセンが新しいお店を作るとき、彬子相談役はそのお店のなかにフラワーショップを加えたいと思われた。「食卓に幸せを」というコンセプトで新しいショップを作ろうとされていたわけですが、パンだけでなくてお花も飾らないと幸せな食卓はできないのではないかと、相談役は考えられたのですね。

それで花について助言してもらう人を探すために東京へ出ていらした。1967年の春のことです。ところが第一園芸、日比谷花壇、ゴトウさんと、いろいろな店をまわられたのですが、生き生きとした花が置いてある素敵な花屋さんが、なかなか見つからなかった。

これはという花屋さんは東京にもないのかしらとがっかりされていたときに、そのころまだ小さかったお嬢さん[7]——つまり現アンデルセン社長ですが、高校は恵泉で学ばれました——が、ふと「こんなところに小さな花屋さんがあるわ、お母さんが好きそうな花屋さんよ」とおっしゃったそうです。それが帝国ホテルの近くの飯野ビルにあった小さな花屋、つまり私たちのお店だったわけです。

「びっくりしたわ。それまで一週間かけて東京のいろんなお店を見てまわったけれど、ほんとうにあんな素敵な花がおいてあるところはひとつもな

7　吉田正子 高校25回（株）アンデルセン現代表取締役社長

かったもの」。

どんな花が置いてあったかというと、パンジーです。当時の日本のパンジーは紫や、紫に黒が入ったもの、黄色ぐらいでした。ところが私たちのお店、センターにはオレンジやブルー、白など、きれいな色のものがいっぱいあった。それは園芸科の山口美智子先生が、センターのために米国のバーピー社[8]から種子を輸入して育ててくださったものでした。伊勢原から毎週、定期便で飯野ビルのお店に運ばれてきていました。

「ああこれだ、私はこの花屋さんに師事したい」、相談役はそのときそう直感されたそうです。その日はお帰りになられて、後日あらためて指導してほしいというお話をいただきました。そんな出会いがご縁で、もう40年もつづいています。広島のフラワースクールの先生たちは、この話を聞いたのははじめてだったそうで、とても喜んでくれました。

このようなことがあったわけですが、まずは今日の園芸センターの基礎となったエピソードをお話ししたほうがいいでしょうね。

飯野ビルでの経験

経営状態の厳しい園芸科の財政を支えるため、1954年に事業部を作りました[9]。 私は園芸科を1952年に卒業して、「後楽園」で遊園地の花壇設計と管理を5年間やって、それから花屋に移りました。そのころはまだ、お店は斉藤ビル[10]にありました。清水先生[11]の奥様のご実家のビルですが、地下のポンプ室の隣という立地条件の悪いところにありました。

そんな場所だったので店舗では花はまったくといっていいほど売れず、専ら出張活け込みの仕事だけでした。私たちは花屋というのは地上でなければできないと、機会があるごとに言っていました。清水先生も環境のよいと

8　Burpee；マリーゴールド、ジニア等の育種で知られる米国の種苗会社。1876年にフィラディルフィアでW.Atlee Burpeeが創業。

9　短期大学園芸科の卒業生が母校の財政援助の目的から、恵泉女学園事業部恵泉園芸センター経営店を世田谷校内に開設。収益事業部として発足した（注２参照）。『恵泉女学園五十年の歩み』p263-265、p295-296、p349ほか参照。

10　恵泉園芸センター京橋店 斉藤ビル地下 中央区宝町3丁目7

11　清水二郎 恵泉女学園第二代学園長

ころを探してくださっていたところ、山下先生[12]のご友人でいらした東洋英和の長野先生[13]が飯野海運社長の俣野健輔さんをご存知で、「飯野ビル[14]を建てたばかりだが、小さなスペースならあるはずだ」と。

清水先生が交渉してくださって、2.9坪のスペースを手に入れることができました。私たちは万々歳だと大喜びです。これで私たちの花屋はもう大丈夫だと思いました。

飯野ビルは今もそのままありますけれど、当時は大きい立派なビルで、建築賞を受賞したビルでした。入っている会社も一流ですから、会社のレセプション[15]などがたくさんありました。まだエレベーターが動いていない階もあり、レセプションの会場まで階段をとんとんと上がって、これこそ花屋だと嬉々として働きました。ほんとうに忙しくて、岡見先生[16]や宇佐先生[17]、山口先生[18]、みんな手伝いに来ていただきました。1960年の11月のことでした。

クリスマスには山口先生がリースやファンシーボールを作ってくださり、また学生が一生懸命に作ったものもお店に飾りましたら、それがとてもよく売れました。働きづめのままなんとか12月が終わり、うれしいうれしいの気持ちでお正月を迎えました。

ところが、この飯野ビルでも問題が出てきました。お店の位置はビルの守

12　山下安武　旧姓権藤　北大卒、1949年2月より恵泉女子農芸専門学校に赴任。1950年恵泉女学園短期大学教授（生物・育種）1957～1973年主事（1962～63年日本ビート工業株式会社農務部長）。

13　長野彌　東洋英和女学院院長（1947～1972年在任）

14　飯野ビル　千代田区内幸町2－22

15　飯野ビルへの移転・開業等のためテナントとなった各社が歓迎会、接待の会を行った。

16　岡見義男　蘭研究家。1946～1962年恵泉女子農芸専門学校教授、恵泉女学園短期大学園芸科・園芸生活科専任講師（花卉園芸・花卉装飾）。

17　宇佐節子　旧姓井上　恵泉女子農芸専門学校1回 Pennsylvania School of Horticulture for Women卒、コーネル大学にて園芸学、花卉装飾学を学ぶ。ニューヨークおよびカリフォルニアのフローリストで研修。恵泉女学園短期大学園芸科・園芸生活科・園芸生活学科 助教授（花卉園芸・花卉装飾）。

18　山口美智子　津田英学塾卒、1939年恵泉女学園普通部英語教諭、1941年河井道の推薦により渡米。 Pennsylvania School of Horticulture for Women卒、1943年高等部園芸科設立の中心となる。1945年恵泉女子農芸専門学校教授、1950年短期大学園芸生活学科教授（英語・花卉園芸）。1960年オハイオ州立大学、ブルックリン植物園で園芸学研究。1962～64年、1974~79年主事・学科長、恵泉園芸センターフラワースクール校長、恵泉女学園短期大学名誉教授。

衛室を予定していたところで、暖房設備もない場所だったのです。もうほんとうに寒くて外のようなのです。地上に出たいと無理をいって飯野ビルに移らせてもらったのですが、こんどは寒さです。ファサードケースを置いたりして、なんとか風を避ける工夫をしましたが、そうするとお店のなかがよく見えません。

それに、お役所に囲まれていましたので、入ってくるのは昼休みのために足を運ぶ男の人たちばかりで、声をかけられるのは「姉ちゃんトイレどこ？」、「そこの階段をおりて……」。そのうち私は馬鹿らしくなって適当にあしらっていたのですが、お店の若い人たちはていねいに対応していました。「姉ちゃんたちなに売ってるの？」、「見ればわかるでしょう！」、「あ、そう、姉ちゃんたちを売ってるのかと思った」。そんなやりとりばかりで、私は男性に腹を立てて食って掛かったり、そのことを百瀬さんに叱られたりしていました。

ある日、とうとう思っていたことを清水先生に申し上げました。「ここは待ちに待った地上だけれど、花屋はやはり花がたくさんあって、ある程度の広さがないと駄目です」と。「きれいな花があって飾りがいがあって、そこにきれいな私たちがいて(笑)、それでこそ花屋です。こんな狭い小さな場所はドアでもつけて園芸相談のコーナーにしたほうがずっとましです」と、そう申し上げました。花のコンサルタントですね。花の相談所にしたいと提案したのです。結婚式のドレスや髪飾りのことから会場の相談にも応じますとか、つまり花のことならなんでもご相談にのる、そういうふうにしてお客様に喜んでいただけるようにしたい。「そのほうが絶対に儲かります、恵泉園芸センターは収益事業です、安い花を１本2本売っても儲けになりません」と、私は真剣に清水先生に訴えました。

ところが、私の話を聞いているうちに清水先生の顔色がみるみる真赤に変わっていって、「空疎、空疎です！　そういう空疎な考えを持っている人は、考えを改めてもらわなければならない」と。辞めてもらわなければとは言われませんでしたが、恵泉というところはそういうところではない、あなたたちが一生懸命働けば、その働く姿を見てお客様が買ってくださる。とにかく一生懸命に働かなければいけない、と言われました。そして「その働きがい

やだとは何ですか！　姉ちゃんといわれてなにが悪い。私なら、言われたって、喜んでやります！」。

それはもう大変な剣幕でしたよ。そのやり取りを大桑さん[19]や百瀬さん[20]、佐藤さん[21]の三人が見ていて、どうみても森山さんの負けね、私たちは清水先生が正しいと思うと言うのです。ああ弱ったなぁ、と思いました。私一人じゃできませんし。それからみんなでどうしたら花の売れる花屋になるのか話し合いをしました。

まず花を入れる缶をピカピカにきれいにしようということになりました。花が売れないから水替えばかりするわけです。毎日毎日、缶を洗うだけで何が事業部だと内心では思いましたが、しかたがありません。山口先生はなんとか協力するとおっしゃって、パンジーを育てて供給してくださった。私たちはそのパンジーをきれいに飾った。一生懸命店をきれいにしたのです。

さきほどお話したアンデルセンの相談役がいらしたのは、ちょうどそのころでした。

要するに私は、清水先生に空疎だといわれて、それでようやく一生懸命に働くようになったのです。私は反省なんてあまりしない性格ですが、『広辞苑』もひいて、「一生懸命」というのはじつは「一所懸命」の転であり、一所懸命は「賜った一ヵ所の領地を生命にかけて生活の頼みとすること」とありました。なるほど…！与えられた場所はそこしかないのですから「一所懸命」です。それでも、ただ働いてもやっぱり儲からないと私は思いました。それで、どうしたら儲かるかをいつも考えていました。たとえば花をいけることにしても、どうしたらみんなが上手になれるのか、器はどういうものが喜ばれるのか。毎週土曜日には研究会を持ちました。そしていまのフラワースクールの前身の「スタディグループ」ができるわけです。

アンデルセンの彬子相談役はこの話を聞いて「そんなエピソードがあったの。私も清水先生という方にお会いしたかった。私はそういう考えでやっているなんて、全然気づかなかった。とにかく、あの美しさと、掃除が行き届

19　大桑徳子　短園3回
20　百瀬和子　短園8回
21　倉松礼子　旧姓佐藤　短園9回

いているということに感動したのよ」とおっしゃってくださいましたが、まあ、なにせ暇でしたからね。(笑)

スタディグループ発足

あのころの日本のお葬式の花かごは、銀色のひし形の器に菊をまっすぐに入れていくやり方でした。私たちはそこからどうにかして抜け出したかった。あるとき誰かが、お葬式にユキヤナギだけの花かごはどうだろうと言ったのです。そんな素敵なアイデアがあるでしょうか。私は真白いユキヤナギがふわーっと入ったバスケットを思い描きました。

それではというので、はじめてユキヤナギを活けてみたのですが、仕入れたユキヤナギは開きそうもない。弱ったと思ったのですが、私は「お葬式は明後日なんだから、二日もあれば開くよ！」と、自分に言い聞かせるように言ってのけていました。でも、結局、花は当日になっても開きませんでした。当然、お叱りを受けました。平謝りに謝ってお許しいただきましたが、やはり菊でなくては駄目だと言われて、とても残念でした。

それ以来、それまで花の仕入れは人に頼んでいたのですが、百瀬さんが市場に行くようにして、仕入れの仕方から変えていきました。カゴも変えました。第一園芸に資材屋さんを紹介していただいて、銀色ではなく白に塗ってもらうことにして、カーネーションはホルダーをつけたり、とにかくどうしたら美しいフラワーアレンジメントができるかを考え続けました。

そのときにいちばん大切にしたことは、お客様に喜んでいただかなければどうしようもないということ。菊を使わないなら、使わないなりのものでお客様の心をしっかりとつかまなければならない。まだまだ失敗の連続です。ユキヤナギのときのように花が「だらん」となってしまったらどうしようもない。比較的安い花では、やはりうまくいかない。どうするのがいいのかと、いつも考えていました。

そして暇だったものですから、土曜日の午後に先生方と一緒に勉強会をしようということになりました。宇佐先生[22]や、アメリカでフラワーデザイン

22　宇佐節子　前出(注17)

を学んでこられた植松睦子さん[23]を、まず講師にお呼びしました。宣伝用に大きな写真に撮って壁に貼ったり、人を集めたりもしました。

そのうちに評判が立ちはじめました。「あそこはなにをやっているの？」、「なんだかわからないけど、とにかく一生懸命働いているところだ」と。みんなが生き生きしている、そういうふうになっていったのです。そのあたりから、次第に売り上げが増えていくようになりました。

センターに集い、出会った人たち

センターの話は、サクセス・ストーリーです。ある時期は収益が年々倍増していきました。なぜ、そんなことができたのか。

今日までにセンターで働いてくれた80名くらいの人たちは、ほんとうによく働いてくださった。私に叱咤激励というか、まあ、怒鳴られて働かされた(笑)。申し訳なかったとは思っていますよ。でも、なぜそんなに怒鳴ったかというと、自分も含めて誰もがそれぞれ一所懸命に働かなければ、あるいは工夫をしなければ、勉強しなければいけない。他の人と違うことをしなければ、人の心を打つことをしなければならないからです。

そういうことを毎日毎日、私から口うるさく言われるわけです。それなりのものは身につけてもらったと思いますし、なかにはセンターを辞めてからお店を持った人もいました（でもせっかくの機会ですからついでにこの場を借りて、少しいいすぎたカナァ…とも思いますので一言だけ謝っておきます)。それぞれに一生懸命働いて、一生懸命勉強し、そして私たちの技術も売り上げもどんどん伸びていったのです。

しかし、私たちそれぞれの努力のほかに、もっと大きなことがありました。ひとつはアンデルセンとの出会いですが、その次にあげたいのはヒクソン先生との出会いです。これはひとつの奇跡だったと思っています。

ヒクソン先生

ビル・ヒクソン先生[24]は私たちに、お花の美しさとはなんなのかということ

23　植松睦子　旧姓土居　高校7回　短英6回　短園8回

を、抽象的にではなく、具体的なかたちではっきりと教えてくださった。

ヒクソン先生の説明は明快でした。美しく花を生けるにはなにが大切か、ただ漠然と美しく活けましょうというのではありません。アレンジメントのプリンシプル(原理・原則)を、第一に考えなければいけない。その基礎をしっかり踏まえた上で活けることを何度も何度も繰り返す。そしてはじめてアレンジメントが美しく花開くのです、と先生はおっしゃった。

それから自然です。自然を観察しなさいといわれた。自然からどれほど大きなものを得られるかということ。しっかりと自然を見なさい、観察しなければ、あるいはそれに浸ってみなければわからない。あなたたちは園芸科で花を作っているから無意識のうちにわかっているかもしれないが、それだけでは足りない。意識的に自然から方法を学ばなければいけない。アレンジメントの基礎がしっかりしていれば、自然のほうからなにが大切かを教えてくれるはずだと、先生に教えられました。

もうひとつは心です。花には心がある。その花の心をしっかりと見きわめるには、なによりもその花の性質を知ること。そのためには自分で花を栽培してみなければいけないし、生き生きと咲いている花をもっともっと実際に観察しなければならない。教えられたことはいろいろとありますが、フラワーデザインのいちばん大切なことを、ヒクソン先生は私たちに教えてくださいました。

私たちはヒクソン先生の教えを、山口先生の通訳で学びました。ただ英語を日本語に訳すのではないのです。きっと頭ではなくて心で訳されていると、私たちはささやきあっていました(笑)。なにしろ山口先生はヒクソン先生に惚れ込んでいらっしゃいましたからね。山口先生の熱い思いがこもっ

---

24 Bill Hixson;フローラル・アーティスト。オハイオ州クリーブランドでHIXSON'S Inc.経営。1951年Hixson's School of Floral Design開設。世界中から受講者を集めた。米国のフローラルビジネス界における国際的で幅広い活動に対してフローリスト協会等から表彰多数。1966年恵泉女学園の招きで初来日以来、毎年東京を中心に日本各地で特別講習会、ブライダルショー、フラワーショー等を開催。元恵泉女学園短期大学園芸生活学科特別講師。2006年には「ヒクソン先生来日40周年記念フラワーショー」が如水会館で行われ、恵泉女学園より長年にわたる功績を称え「恵泉女学園名誉アーティスト」の称号が贈られた。

た通訳で教え込まれた私たちの基礎ですから、なんたって心が入っているのです。年月がたてば山口先生も否応なくお年を召されましたが（私も他人事ではないのかも・笑）、でも、その次の人が出てくるのがすばらしいですね。松井美保さん[25]。松井さんに引き継がれて、若い人たちに若い感性でヒクソン先生の心が伝えられていくのです。

フラワースクールの先生方は幸せだと思います。ヒクソン先生が今も、ほんとうに皆さん一人ひとりを大切に思って教えてくださるのです。だから、みんな先生が大好きです。恵泉園芸センターには、そういうすばらしい先生がいて下さるのです。

オアシス日本支社設立のお手伝い

次にオアシス社のことを話します。スミザーズ・カンパニー[26]という会社があって、一般には「オアシス社」と呼ばれていますが、フラワーアレンジで使う緑色のフォーム（オアシス）をつくっている会社です。それまでオアシスは輸入だったのですが、1978年から日本でも生産することになり、ちょうどヒクソン先生が日本にいらしているということで、日本支社設立までの間を手伝ってくれる日本のアドミニストレーターを紹介してほしいと依頼があったそうです。

ヒクソン先生は百瀬さんにどうかと話を持っていらしたのですが、百瀬さんは、自分は忙しくてそんなことはしていられないと断りました。そして「森山さんがいいんじゃないの、あの人は暇だから」と。私は英語もできないし駄目だといったのですが、「恵泉は英語のうまい人がいっぱいいるわよ」、というわけで、恵泉の中学高校、そして英文科の出身で、しかも園芸科でも学んだ植松睦子さん[27]に通訳をお願いすることにして、私がスミザーズ・カンパニーのアドミニストレーターの仕事を兼任することになりました。

じっさいに販売するのは、もちろん各地方の代理店です。私は日本でのオ

25　松井美保 短園19回　恵泉園芸センターフラワースクール講師

26　Smithers-Oasis Company　本社：米国オハイオ州ケント 生け花の花の固定や育苗用培地などに用いるスポンジ状のフローラルフォームの開発により事業拡大。1954年創業。

27　植松睦子　前出（注23）

アシスの生産を請け負った神戸の東洋工業の子会社の日本ソフラン株式会社とも協力して、品質の良い製品を作るために精一杯の努力をしました。この仕事は、とても楽しかったですね。

この仕事は10年続けて終わりになりました。予定通り1988年にスミザーズ・カンパニー日本支社が独立したからです。このとき記念品や感謝状をいただいただけでなく、支社長への就任を勧められたのですが、それはお断りしました。英語ができないからといったら植松さんもいっしょにと請われましたが、私たち二人とも園芸センターにとって無くてはならない大切な人でしたからね(笑)。

この10年間の積み立てが、蓼科ガーデン[28]の土地を買うお金になりました。一生懸命やっている間に製造会社とも販売代理店の人たちとも仲良くなって、みんな恵泉びいきになってくださった。仲良くしながら終わったわけです。これも奇跡のような話ですね。自分で探したわけではないのですから。仕事を与えられたことに、私たちはほんとうに感謝しました。

「花と喫茶」

恵泉園芸センターのフラワースクールは、「スタディグループ」からはじまりました。ヒクソン先生にも毎年おいでいただくようになり、1967年からアメリカで勉強していた百瀬さんもとても成長して帰国してきたので、そろそろスタディグループをフラワースクールにしようと、清水先生のところにご相談に行きました。それまで貸し会議室などを借りていたのですが、貸し手が少なくなり、自前の教室がほしいということで飯野不動産(株)に交渉しているうちに、飯野ビル地下1階に15坪の店舗ができるのでそこを使ってはどうかと申し出があったのです。同じビルの地下ならば立地条件はうってつけでしたが、問題は敷金でした。そこで清水先生に頼み込んだのですが、お金を出してもらえない。それなら昼のあいだは喫茶店をして、夜間だけ教室を開こうと考えました。

28　恵泉園芸センター蓼科ガーデン　長野県茅野市豊平字東獄10210-1三井の森内　研修棟・従業員宿舎棟完成 献堂式1985年7月6日　管理責任者(就任年)山口美智子(1985年)、本多篤子(1989年)短園14回、小澤文子(1998年)短園40回。

しかし、これは理事会で大反対をうけました。「卒業生にミルク・ホールなどさせられない」と理事長の北村徳太郎先生[29]がおっしゃったそうです。清水先生を介してそんなことではありませんとご説明申し上げて、こちらとしては諦めかけたころ、ようやく北村先生がセンターにお見えになりました。それで私が説明して、最後には森山にまかせようと言っていただきました。ようやく許可が出た喫茶店は、清水先生が「花と喫茶」と命名されました。いろんな方々にお世話になって、ちょうど5年間で敷金を返すだけのお金ができたので、喫茶店は閉じて教室だけしました。

「花と喫茶」のことを話したので、建築家の棚橋廣夫さんのことも話しておかなければいけませんね。棚橋さんの奥様[30]は恵泉の卒業生でフラワースクールの生徒でしたが、「花と喫茶」でウェイトレスもしてもらっていました。この出会いから園芸センターの六本木の建物は棚橋廣夫さんに作っていただきました。この建物は東京都の建築賞をいただきました。また上北沢のガーデンフラワーの内装もしていただきましたし、奥沢ガーデンは土地さがしからお世話になりました。蓼科ガーデンも土地選びから関わってくださいました。棚橋さんは私たちの意図を尊重して、恵泉のためにいつも心を尽くして協力して下さいました。

クリスマスの装飾

クリスマスの装飾に美しいキャンドルを使いたいと考えるようになりました。しかしクリスマスのキャンドルなど、そのころはアメリカにしかありません。重いので輸入するとかなり高くつきます。ところが百瀬さんが、そのキャンドルは日本のカメヤマローソク[31]がアメリカからの受注生産で輸出しているという情報を入手しました。

そこでさっそく、カメヤマローソクになんとかツテはないかと探しました。すると、そのころセンターで働いていた杉田和子さん[32]のお母様が、な

29　恵泉女学園第三代理事長（1951.9～1968.11在任）

30　棚橋美喜子　高校13回

31　カメヤマ株式会社　創業1927年　旧名カメヤマローソク　本社 大阪市北区。

32　杉本和子　旧姓杉田　短園17回

んとカメヤマローソクの社長夫人の小学校の同窓生だということがわかりました。さっそく百瀬さんがカメヤマに出向いて交渉したところ、分けてくださることになりました。各種・各色のキャンドルが入りました。1969年のクリスマスに間に合いました。色とりどりのブロック・キャンドルやスノーマンやサンタのキャンドルなどを豊富に使うことができたのは、あのころの日本では恵泉だけでした。

また、このキャンドルが飯野ビルの店の前に積んであるのを見て、驚いた人がいました。「おたくはここのキャンドルを、どうして持っているの？」というのです。カメヤマから仕入れたいきさつを話すと、その人は「カップろうそく」のカップを作っている北洋硝子という会社の社員で、その輸出のことで通産省に来ているのだということでした。私たちは間髪をいれずそのカップを分けてもらう交渉をして、いともあっさりと手に入れることができました。木の実のオーナメントは、百瀬さんがアメリカから買ってきたのがすぐなくなってしまった。アメリカでないと入手できないということでしたが、探しはじめてみたら韓国で「ロッテ」が製作していることがわかりました。そこで百瀬さんが当時親しくしていた園芸科の英語教師の朴先生[33]に頼んだわけです。すこし時間はかかりましたがほんとうにロッテが製造していることがわかり、そして話が決まり、1969年から仕入れはじめました。

そんなこんなで美しいクリスマス装飾用の材料が全部揃うようになりました。クリスマスの装飾の質がぐっと上がりました。そのころ、1971年のことですが、百瀬さんがソニービルの中央ロビーに、恵泉がクリスマス装飾品の店を出すことを決めてきました。出店している三週間はすごく大変でしたが、それはもうよく売れました――作る人はみんなへとへとになりましたけどね。

それを見て、今度は有楽町の阪急がオープンする時に話があって、阪急デパートのショーウィンドウと店内を生花で飾ることになりました[34]。続いてクリスマスはドライフラワーでしたが、全店を恵泉が請け負いました。1月に

33　朴敬姫　短大園芸科英語講師（1967～1972年在任）

34　1984年10月。「オーセンティック」のテーマのもと白一色の生花の装飾が評判を呼ぶ。

はショーウィンドウに花壇を作りました。奥峰子さん[35]が陣頭指揮をとりました。このときは湿気が出てショーウィンドウが曇ってしまい失敗したと思いましたが、それでもとてもきれいでした。

ひとつのことが成功すると、次からつぎへと不思議な出会いが広がっていったわけで、翻弄されもしましたが、やっていて楽しかった。そのほか恵泉関係の方たち、お母様、お父様、おじい様、おばあ様まで、たくさんの方々に助けられました。清水先生は教会関係の結婚式やお葬儀などの注文をとってきてくださいました。死ぬような思いでやりましたけれども、そういう豊かな出会いが、いくつもつながっていったのです。

センターの冒険――ヒクソン先生の著作出版

もうひとつ、私たちは「冒険」もしました。ヒクソン先生の本の出版[36]です。それもまた百瀬さんの発案だったのですが、清水先生は反対されました。素人が本の出版だなんて、とんでもないと。

でも私たちは、出版するのはヒクソン先生であって、自分たちはそれを手伝うだけだからということで、あちらこちらを説得にかかりました。ようやく印刷を凸版印刷に引き受けてもらうことになりましたが、初めての取引なので前金をいくらか払ってほしいということで、私が清水先生に申し上げて、武藤理事長[37]のところに相談に行きました。理事長は「園芸センターがやっていることは収益事業でしょう。収益事業として出発したのですから自分たちで何とかしなさい。儲けてあげるからお金を貸してくれなんて、そんな甘い考えはおかしいですよ。理事会は、資金援助はできません。」といわれました。

確かに一理あると思ったので、それではと凸版印刷と交渉したのです。そしてこれは絶対売れるものだからと、まあ私のことですからどれだけちゃんと説明できたかわかりませんが、最後には後払いでいいと言ってもらいまし

35　奥峰子　旧姓澤田　短園31回　ホリーホックガーデン主宰

36　*Flower Arranging* 1971年 ビル・ヒクソン著 対訳山口美智子 発行・販売 恵泉女学園事業部 恵泉園芸センター A 4 判200頁 初版定価6,000円 再版定価8,500円.

37　恵泉女学園第四代理事長（1968.12～1989.6在任）

た。１冊うまくいくと凸版印刷に信用ができまして、その後、８冊出しました[38]。私たちは利益だけではなくて、本を作ることによってアレンジメントとブケーを学びました。ヒクソン先生のお手伝いをすることで学んだのです。本当によい勉強になりました。

「恵泉フラワーバーン」の開店と百瀬さんの死

オハイオに「ヒクソンズ・バーン」というお店があります。納屋という意味ですね。アーリー・アメリカン調の古きよき時代を思わせる納屋を模した建物で、美しい装飾―売り物でありアレンジの花材でもあるドライフラワーや、乾燥させたトウモロコシなどが天井から下がり、壁にはリースやスワッグ―が施された店舗です。百瀬さんが恵泉でそれをしたいということで、ヒクソン先生の許可を得て「恵泉フラワーバーン」をつくりました。 このお店は飯野ビルの地下1階、階段脇のスペースを利用して計画され、誰もがあっと驚く店舗に大変身、1968年10月にオープンし、六本木移転まで続けました。ドライフラワーや各色そろった美しいキャンドル、品のよい美しい小物―手織りのテーブルクロスやガラスの花器―などが置かれ、スペースの小ささを活かした恵泉フラワーバーンは、センスとユニークさで評判を呼ぶようになりました。百瀬さん、半谷さん[39]、井上さん[40]などセンタースタッフ全員で『ドライフラワー』という本[41]も作りました。それも素敵な本でした。

---

38 *A Treasury of Bridal Bouquet,* 1972年 B3判151頁 定価12,000円. *Christmas Decorations* 1973年 A4判64頁 定価2,800円 再版 B4判 定価5,000円 別冊和文解説書A4判付. *A Collection of Bridal Bouquets The New Wedding Album from Bill Hixson*, 1975年 B3判 154頁 定価15,000円. *Bouquets*, 1979年 B3判160頁　定　価18,000円. *Wedding Flowers,* 1982年 B3判 150頁 定 価19,500円. *Floral Tributes*, 1984年 A3判 80頁 定 価10,000円. *A History of Weddings, Tradition, Bouquets* 1996年 106頁 定価4,500円 別冊和訳付 1,500部. *The Best Collection of Bridal Bouquets*, 1996年 A3判132頁 定価10,000円 以上ビル・ヒクソン著 (対訳和文解説山口美智子) 発行・販売 恵泉女学園事業部恵泉園芸センター

39 半谷京子　短園23回　アトリエ叢主宰

40 井上なお子　現姓天野　短園21回

41 『Dried Flower ドライフラワー』恵泉女学園事業部 恵泉園芸センター著　1979年Ａ４判72頁　定価4,000円　初版4000部

さっきお話した有楽町阪急のオープンの装飾も、ある意味では冒険でした。そういった冒険をひとつずつクリアしていくことで、センターの一人ひとりにも力がついていきました。

ところが阪急のクリスマス装飾が終った直後から、百瀬さんが体調をくずしました。癌でした。お医者さまから余命三ヶ月といわれましたが、お父様から本人には言わないで欲しいといわれました。このときは、ほんとうにショックでした。私なんか百瀬さんに引っ張られて、百瀬さんのアイデアと仕事を、裏方として手伝ってきたようなものでしたから、打ちのめされて自分も死んでしまいそうな気持ちになり、百瀬さんが死んだらセンターなんかできっこない、つぶれるだろうなァと思いました。しかし百瀬さんはそれから奇跡的に回復し、三ヶ月でいったん復帰。その後1988年の３月まで三年間元気で働き続けました。

センターを支えた力はなんだったのか

そんな暗い絶望的な状況に陥っていたにもかかわらず、然し、あのころはフラワースクールの生徒を募集すると入学希望者は引きも切らさずで、お店の売り上げもうなぎのぼりだったのです。当時の人たちがほんとうに頑張って、よくやってくださった。百瀬さんが亡くなったのが1988年の6月でしたが、その翌年くらいからバブル景気がはじまり、さらに売り上げが伸びていきました。

センターはついているとしか思えない。実力以上のものが与えられ、それがひとつだけではないのですから。なぜだろうかと、いろいろ考えました。私は清水先生が言われた「私たちは空疎ではいけない」という言葉の意味を思い起こしていました。私たちは「一所懸命」、自分が与えられた場所で、ひとりひとりそれぞれに、ほんとうに一生懸命に働きました。

それやこれやといろいろありました……私は今日の話の結論をどうもっていこうかといま思案しているのですが……ほんとうにたくさんの方々との出会いと、それらの方々に援けられてここまで来たのだとしか、いいようがありません。

百瀬さんの死のショックから少し立ち直って元気になってきたところで、

奥沢ガーデン[42]をオープンしました。1992年の12月でした。そして、これでいいかな、ここまで頑張ってきたのだから、私の仕事もここまでかなと思っていた矢先に、園芸科が廃止されるということが告げられました。もう私は力が抜けてしまって、自分の仕事は終わったと思いました。

しかし過去のことばっかり言っていても仕方がありません。最近の学園の園芸についての話し合いなど見ていると、若い人たちがそれぞれに一所懸命やっていますね。恵泉というところは不思議なところで、みんな不思議な馬力というか底力があります。私はもう退職し、若い人たちにセンターの仕事を譲りました。私たちがやってきたのだから、やれないわけはありません。

それから、センターはここにおいでになっている皆さんに、皆さんおひとりお一人にお世話になってきたし、いまもお世話になっています。皆さんそれぞれが、いつどこにいても、園芸センターのために何かしてくださいと声がかかったら、手伝っていただきたい。園芸の継承も、志さえあればやれると信じています。〔拍手〕

以上

42　恵泉園芸センター奥沢ガーデン 世田谷区奥沢7-14-5　オープンハウス案内に「みなさまの花のある生活に、そしてさらに〈ガーデンライフ〉にもお役立つことを願って」とある。2004年3月閉店。